

第4回福岡女子大学の抜本改革に向けた準備委員会議事録要旨

1 日時 平成20年9月16日(火) 13:30~16:30

2 場所 ホテルレガロ福岡 カトレア

3 出席者

海老井委員、天野委員、高木委員、坂本委員、岡崎委員、織田委員
川島委員、徐委員、富山委員、吉田委員、和田委員

4 会議の内容(次第参照)

(委員長)

それでは第4回準備委員会を始めさせていただきます。

審議に入る前に、高校生へのアンケート調査結果について、事務局の方から説明をお願いします。

(事務局)

今回の調査は、福岡女子大学の平成20年度入学者に占める割合の高い出身高校、それから過去にスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定を受けたことのある高校の2年生女子生徒を対象に実施した。

回収率は99%、1,133名の生徒から回答をいただいた。

回答した生徒の内、1,067名が大学・短大への進学を考えており、これらの生徒の回答状況を調査結果としてまとめている。

○回答者の属性

- ・文系志望6割に対して理系志望が約4割
- ・全体の7割が国公立への進学を希望
- ・大学選びの優先条件として、「希望する学部・学科などが設置されている大学」と回答した生徒は67%、「自宅から通えることを優先する」と回答した生徒は22%であった。

○学部・学科の選択

「入学時に決めずに、2,3年次で決めた方が良い」と回答した生徒は46%、これに対し、「入学時から決めてあった方が良い」と回答した生徒は31%であった。

○学生参加型・体験型学習への関心度について

演習型の授業に関心を示した生徒は55%、就業体験の方については、91%の生徒が関心を示した。

○英語集中プログラムや英語による授業などの英語教育について

「受けてみたい」「どちらかと言えば受けてみたい」といった回答を合わせると、74%の生徒が関心を示した。この割合を文理別に見ると、文系志望の生徒の方が理系志望の生徒よりも10ポイント程高い。

また、英語以外の外国語の関心度については、フランス語が最も高く、次いで中国語、ドイツ語、韓国語といった状況。

○留学について

「留学したいと思う」と回答した生徒は56%であり、「留学したいと思わない」と回答した生徒は44%であった。

「留学したいと思う」の回答割合を文理別に見ると、文系志望の生徒の方が、理系志望の生徒よりも12ポイント程高い。

留学したい地域では、ヨーロッパに次いで、アメリカ・カナダ。留学期間は1年を希望する生徒が多く見られた。

○学生寮について

学生寮を人間関係力を培う場として活用することについて、76%の生徒が「良いと思う」と回答した。「良いと思わない」と回答した生徒は6%未満であった。

○自分の将来をどう描いているかについて

「会社や公務員として働きたい」との回答が一番高く37%、それから「分からない、考えていない」が21%であった。

(委員長)

アンケート調査結果で、何か意見、質問等があればお願いします。

(委員)

福岡県の女子高校生は非常に保守的というような話を伺っていたが、アンケート結果は、この委員会の審議にとって勇気づけられる結果だと思う。ただ、スーパー・イングリッシュの方の高校生の影響でこういう値が出ているならば、その辺はちょっと勘案して考えないといけない。

(事務局)

集計をやっている段階で差は顕著には見られなかった。

(委員)

「学生寮を人間関係力を培う場として活用することについてどう思うか」というところで、非常に肯定的な意見が多いが、これは、もし自分がそういった場合であっても、やはり肯定的だというふうに捉えて良いか。

(事務局)

そこまでの質問はしていない。

(委員)

海外とはいっても、やはり欧米に対する関心が非常に強く、アジアはあまり関心がないということをどう理解するか、これは気を付けなければいけない点ではないかと思う。

(委員)

ICU でも、アジアに目を向けて欲しいというのがあるが、たくさん選択肢がある中で、現実的には欧米、英語圏に偏るという実情がある。

(委員)

私どもの調査でも同じような傾向。

(委員)

韓国では、最近留学先としてヨーロッパは人気がない。また、最近ではフランス・ドイツ語を学ぼうとする学生はほぼいない。

(委員)

全体的にそのような傾向にあるのかも知れないが、これから段々変わって来るのではないかと思うし、また変えて行かなければならないところだと思う。

(委員長)

それでは、基本計画案について審議を行う。

「第1 改革の基本理念」

「第2 学部学科の再編」

「第3 新たな教育システムの構築」

＜大学より追加資料配付＞

(委員)

いわゆる専門教育の部分について、この前の会議の時点からもう少し大まか、大括りにしたような考え方が出ているので、それに関連して大学の考え方を補足する。

「環境システム」、「食・健康」、「国際文化」、「国際政治経済」こういうキーワードでまとまるような教育を考えている。「国際文化」については、かなり強調したいと考えている。グローバル社会でビジネスと言うと、どうしても「金融」というイメージが強い。しかし金融に関するような教育よりも以前に、やはり異文化理解、それから社会の思想、異なった文化の思想を理解する、そういう国際文化という教育の視点が大変大切。

それともう一つ、女子大学として女性の将来キャリアを考えると、そういった視点を何らか明確な形で盛りこむ事ができないかなと思う。

(委員)

「教育の基本方針」の所は、この大学がどう変わるのかということ皆注目すると思う。その時のキーワードが「4年間を広義の意味での教養教育をする学士課程の大学である」というふうになっているが、ここの所、一般にこれを聞いた時に上手くその真意が理解してもらえのだろうか。これを外へ出して理解してもらうのに、もうちょっと工夫がいるのではないか。「専門性を失うのではないか」と心配している人もいるようなので、そのことをもっと具体的に理解をしてもらう必要があると思う。しかし、これまで議論してきたように、何か狭い意味の専門教育をするとか、守るとかということではない、新しい意味での専門性へ導く教育をする訳だから、そこら辺の表現はなかなか難しい。

「教育課程の編成方針」の所に「全学共通教育と専門教育から編成するくさび型カリキュラムを基本とし」とあるが、これには割にその辺の意味合いがよく込められていると思うので、その辺をもう少し原理的に上手く表現する必要があるのではないか。幅広い人文、社会、自然にわたる見地を修得することと、基礎的な専門能力を付けさせるということ、4年間で総合的にやるという、何かそこら辺の所を少し上手く表現するような工夫が必要。

(委員)

教養という言葉が持つ曖昧な響きということに対する危惧が多分かなりあると思

うので、そこをどういうふうに言ったらいいのかということ。

それともう一つ。「教育の基本方針」として、女性がこれから社会のリーダーシップを持って、男女共同参画社会を作る、そういう人を育てるんだということが、はっきり謳われている方が大事だと思う。

(委員)

同感。やはり教養教育という言葉は、いろいろ幅がありすぎて、ちょっと怖い。

専門教育もやる訳だから、やはり、そのことに触れる部分はどうしても必要なのではないかと思う。

それと、先ほどのキャリアの視点をもう少し捉えていくのがいいのではないかと思う。

(委員)

書き方の問題だが、「教育課程」で「(1) 国際共生プログラム」というのがあるが、これはかなり具体的に書かれている。その次に「(2) その他の全学共通教育」があり、共通のことを言っているのだから、それで良いように思う。その後に専門が出てくるというのは、ちょっと今の流れからいうと、バランスを欠くかも知れないので、上手く(1)の項目に取り入れるなら、取り入れてしまうとか。全学共通の「国際共生プログラム」と専門というのがある程度のバランスを取った方が高校生達も受け取る時に理解してもらえるのではないかなと思う。

(委員)

(2)の「その他の全学共通教育」の所のひとつ目は、いわゆる初年次教育の話。それはそれで重要なことなので、「初年次教育」という言葉をはっきり使って、これはもう国のレベルの政策でも認められているプログラムなので、それは「国際共生プログラム」の中に埋め込んでいくということは十分可能。

(委員)

これまでの議論からして、自然科学を全員が基礎として学べるようにということが見えるようになった方がいいのではないか。

(委員)

いわゆる国際的な様々な問題を解決するにあたっては、従来の分け方ではなくて、例えば文系の学生にも、まさに環境問題がそうだが、自然科学的な視点が必要だから、そういうものを織り交ぜた新しい履修の範囲みたいなものを考えていくというふうな書き方をした方が良い。従来型の三領域を万遍なくという書き方をしたら、何

というか前とあまり変わらない。

(委員)

それは全くそのとおり。むしろ、そういうふうな色々な幅広い視野こそが実は共生の一つの意味ではないかというふうに思う。同時にもう一つ、共生ということを考えるならば、男女共生と言うか、そういう事も必要だと思うので、全員が自然科学もするし、全員が例えば、名前は何と言うのが良いかは分からないが、「ジェンダースタディーズ」なら、そういうものでもいいが、何かそういう女性がリーダーシップを取る役目をするためには、何かそういう事が勉強できるというようなものも、「国際共生プログラム」の柱の一つに挙げた方がいいのではないかと。

(委員)

教養を身に付けて、その後どうなるのかというところで、やはり女性のキャリア発達をきちんと支援していくんだというところ、そこが非常に福岡女子大の特徴というか、アピールすべき点ではないかと思う。

そういう点で、「女性のキャリア」というような言葉がキーワードとして、「教育の基本方針」とか、「教育課程の編成方針」とか、それから「教育課程」の中で一つの分野というか、項目として出てくるべきではないかなというふうに見る。男女共生とか、「国際共生プログラム」の核になるのは、やはり女性一人ひとりの自分の生き方だと思うので、そこの自分の生き方を全体の中で考えるという、核になる女性キャリアを意識させるという所は「国際共生プログラム」の中に、もっと全面的にキーワードとして出て来てもいいのではないかと思う。

(委員)

大賛成。今、文科省の方もキャリア形成の科目化をかなり進めさせているのではないかと思う。私の大学も、キャリア形成というのをかなり正規の科目に取り入れている。「国際共生プログラム」があって、「専門教育のプログラム」があって、「キャリア形成」をそれに並ぶ三本柱くらいに建てた方がこの大学の魅力を作るのにはいいのではないかと。特に女性のキャリア形成についての関心は高いと思う。キャリア形成という枠組みに、インターンシップの問題とか、外国との交流の問題とか、そういうのを全部パッケージにして、うまく作れないだろうか。それは非常に関心の高いところだし、多分大学の使命としても非常に大きいのではないかと思う。

(委員)

キャリア教育とか、キャリアの形成を具体的にどうやるのかということになれば、「国際共生プログラム」にあるような体験型の学習の教育をやりましょうとか、いろ

いる実践型の教育をやりましょうとか、海外にも行かせましょうとか、そういったことの積み重ねが結果としてキャリア教育に結びつくということだろうというふうに理解をされていて、そうした場合に「国際共生プログラム」という枠を作って、またキャリア育成だという話になると、二つ重複する。

(委員)

ある程度、重複するということが起こると思う。要するに、色んな知識を得たり、理解力を得たりする部分と、体験なんかで得る部分とちょっと相対化しても良いのではないかなと思う。戦術的だというふうに言われるかも知れないが、要するにアピールするためには、「キャリア形成」というパッケージは、すごく魅力があるのではないかなと思う。それを上手く作れるかどうかというのは、今の大学教育の中で、非常に大切な部分だと思う。

(委員)

結果として、教養教育をしっかりやっていきましょう、色んな学習プログラムをやりましょう、こういった事が実際のキャリア教育だという話になってしまうのでは。

(委員)

要するに、この共生プログラムをしっかりやれば、その上で能力が形成されるということは、その通りだが、そういうものを目的化しているという部分を見せた方が、やる側にしてもそうだし、受ける側にしてもインパクトがあるのではないかな。

(委員)

女性のリーダーを育てるという時に、やはりリーダーとなるようなキャリア形成をどうやっていくかという意味で大事だと思うが、その打ち出し方のところなんだと思う。

(委員)

昔流に言えば、就職指導のような部分を強化するということになるのかも知れないが、それをもう少し強化なり、プログラムのところで引き寄せてはどうかということ。最近は大変ともやり始めているが、まだまだ中身的にはいわゆる就職教育の延長みたいなところがあるが、それをカリキュラムとして工夫していただいたら、いかがか。

(委員)

福岡女子大では、文科省の現代GPの中で「男女共同参画社会をめざすキャリア教育」という名称で昨年度からGP事業が採択された。その事業の中で新設した授業科

目がいくつかある。その授業の特徴は、卒業生とか、あるいは実際にキャリアを形成された方などを多数呼びして話を聴き、ロールモデルとして学ぶことである。また一方で、これは以前からやっているが、ジェンダーの視点というか、女性が自ら意識してキャリアを育てるという視点を、あらゆる授業科目の中に教員が出来るだけ入れ込むということを、3年程前に大学の評議会として決議して行っている。

(委員)

もう一つキャリアというと、従来の捉え方では何か働くというようなところに狭く捉えがちだと思うが、ここの大学で新しく目指そうとしているのは、リーダーシップだから、ただ単にどういうキャリアを積み上げて働くかというような、具体的なレベルというより、もっときちんと人のリーダーシップを取って、新しい社会を展望して、その事を実現するための戦略を立てることが出来るのか、そういうふうなもう少し高次のものだというふうに理解しているので、それが表れることが大事だと思う。

やはりさらに特別な何か味付けなり、色付けなり、何かしなければ、ただ男性も女性もしっかり勉強したからといって、男女共同参画社会を作る為のリーダーには、なかなか出来ないのではないかというふうに思う。

(委員)

一般的にも今、学生のキャリア形成に関する意識を作るというのは、すごく大切な時代になっている。だから、その一環として、女子大は、特にキャリア形成の課題、リーダーシップの問題とか、あるいは男女共同参画社会の問題とか、そういった課題を積極的に取り込む形にしていく必要があるのかどうかという問題が一つ。

古い時代は、大学の就職なんて、しっかり勉強しておけば、自ら結果が出てくる、そういう意識というのは、今も大学の中に無くなったとは言えないと思う。要するに基本的なことを勉強しておけばいいと言うが、今の学生達の様子を見てみると、やはり1年生からきちんと自分のキャリアをどうするかということを考えさせる動機、あるいは体験は必要で、そういうものを目的化するかどうかという判断である。まあ、そこまでやらなくてもいいのではないかという考えもある。しかし、今の状況というのはなかなか難しい。

女子だけではないと思うが、各大学はキャリア形成に非常に関心を持っているし、文部科学省も関心を持っている。大学がキャリア形成ということ意識的に打ち出すことは、今の高校生の気持ちにミスマッチというよりは、マッチしているのではないかと思うが。

(委員)

いくつかの観点から、キャリア形成ということ全面的に打ち出す必要があるとい

うふうに思う。

まず、女子大は現在でも女性のキャリアに非常にスポットを当てた講座が用意されていて、またそれに加えて就職支援により就職率が非常に高い。だから、既に福岡女子大は女性のキャリア教育について、一定の実績があるというふうに判断している。それが、高校生に見えないのは、とても勿体ないことであるということが一つ。

それから、今の若い人達は、自分の将来に対しての不安というのがものすごく強くて、自分がちゃんと社会に出ていけるだろうかとか、社会に出て上手くやっていけるだろうかとかいうような進路に対する不安がある。キャリアと言った時に、職業生活だけではなくて、人生とか、生涯とかいうような概念で、自分のこれからをどうするかという事を考えさせる視点というものが大学の中での必須のプログラムだと思っている。それが高校生から見て、福岡女子大に進めば、自分の将来が見通せるというか、ある程度の大まかなデザインを描けるというようなことがあると、それは高校生から見て女子大へ進みたいという、一つの動機になるのではないかというふうに思う。

それから、もう一つは福岡女子大に与えられている社会的な役割は何かと言うという点では、改革の柱の一番最後の「社会貢献機能の充実」という所で、「福岡の女性の生涯にわたる再学習拠点を目指す」という言葉があるが、やはり女性のキャリア発達を支援する大学なんだということをもっと前面に打ち出した方が、高校生、それからその保護者にとっても、プラスになるのではないかというふうに思う。

(委員)

今、言われたことと関連するが、例えば狭い意味でのキャリアということではなくて、自らがいかに生きるかとか、女性としてどう生きていくのかとかということは、結局本当の意味での教養教育がなされれば、自ずとそういったことが力にもなっていく。だから、教養教育ということと、女性のキャリアということとを、2本建ての別々のものではなくて、まさにリンクしているものだということを前面に打ち出してやると、教養教育と女性キャリア形成といった所が上手く融合できるんじゃないかなと思う。勿論キャリアも形成するし、まず自分の学びも形成するというのが、教養教育の一つの目玉だと思う。勿論、知識だけじゃなくて、ディスカッションすることによって、色々な違う人達の意見をどうまとめ上げていくかということで、リーダーシップの取り方なども学んでいく。そういった小さなスキルを積み重ねることによっても、何か大きな、自分のキャリアとかいうところにも繋がっていくのではないかなと思う。誤解を招きやすい教養教育ということはあるが、自分が教えていると、毎日の小さな積み重ねが、長期的に見て、例えば大げさに言うと、キャリア形成みたいなところに繋がっていくのではないかなと常に感じている。人の目には、やはり今言ったようなことはなかなか分からないから、やはり女性キャリア形成ということを前面に出

しておくけれども、実はこういうことで教養教育がキャリア形成に繋がっていくんだよということを表現したらいいのではないかなと思う。

(委員)

質の意味で、この「国際共生プログラム」では、ものすごいキャリア教育をやることになると思う。だから、それをきちんと言葉として表現していきましょうということだと思います。今話してきていることは、個人的な理解ではキャリアビジョン。今後生涯にわたってどのような職業生活なり、人生との関わりのことを考えていくかということや学生時代にちゃんと作り上げていってやるか、そのための支援の仕組みというのは、どうなっているかということである訳だから、そういう実はちゃんと効用も効果もあるプログラムですよということをきちんと書いておけば、皆さんの今言われていることと通じるようになるのではないのかなと思う。

(委員)

グローバル時代を考えて改革するというのなら、より広い視野で考えるべきだと思う。韓国に梨花女子大学があるが、あそこは特に、男性、女性とせずに、広い意味でのリーダーシップを打ち出している。韓国では、梨花女子大学のみならず、どこの大学もそういう傾向。そして韓国では今、外交官試験も 60%以上が女性。司法試験合格者も女性が 50%を超える。韓国では全般的に、国際時代において、より広いリーダーシップが身に付くような教育をしている。だから、福岡女子大学も、そういう観点から考えるといいという気がする。

(委員)

大学というものを具体的に高校生にアピールして、理解してもらう時に、そういうキャリア形成とキャリア意識を、意識的にアピールするというのは、今の時代には大いに意味があると思う。

(委員)

この「国際共生学部」というのは、決まりになるのか。

(委員)

これは仮称。

(委員)

この学部名、全国で初めてではないか。

(事務局)

私どもが調べた範囲では、学部としてはないと思う。

(委員)

前段の再編の考え方のところで、多様性と持続性という言葉で、出てくるものは何かと言ったら、「国際共生」というような言葉。

(委員)

大学からの案では、学部名としていくつか候補案が出ていたが、その案の中には入っていた。

(委員)

いろいろ伝統のある大学が日本にあるが、新しくやるのには分かりやすいかなという思いもあるが。

(委員)

「国際共生プログラム」というのは、すごくネーミングがいいと思う。学部名というふうになると、ちょっとあんまりマーケットブルじゃないというか、でも確かに内容的にこれしかないのかなと、ちょっと悩ましい。

(委員)

「国際文化」とかいうのは流布し過ぎているし、「環境」があって「食・健康」があるという統一ネームとしては、いいかなと思もするが。

「国際共生プログラム」というのはウケがいい。プログラムのいいのだけど。これでしばらく熟すかどうか、事務局で見られたらいい。

「共生」というのはかなり古くから言われている概念ではある。

(委員)

私はいいと思う。ただプログラムときた方が据わりがいい。

(委員)

今、いろんなところで共生の概念が使われているから。

(委員)

共に生きるだからいいのではないかな。

(委員)
いいと思う。

(委員)
国際何とか学部という、いわゆる4文字学部がひと頃流行った。

(委員)
グローバリズムを日本語にしたら、国際しかないのか。

(委員)
世界という言葉を使うこともある。

<休憩>

(委員長)
それでは再開させていただく。

「第4 魅力ある留学制度の構築」

「第5 教育の場としての学生寮」

「第6 入学者選抜の多様化」

(委員)
「留学」という言葉に統一されているが、「海外研修」という言葉は「留学」とはまた別であるというふうな理解をしていいのか。現在、福岡女子大では、学生が24名カリフォルニア州立大学の方に研修に行っているが、そういうものは、今ここでは、留学として想定してないと、そういうふうに厳密に解釈するのか。その辺りの「留学」という言葉使いと「海外研修」という語の使い分け、それについての皆さんの理解はどうか。

(委員)
そこまで堅く考える必要はないのではないかと。そういう多様な形態はありうるということ。

(委員)
一般的な留学であれ、海外で色々研修されることであれ、それは基本的に、教育の

システムの一つに組み入れていくというような考え方をここに出しているの、大学がそういうプログラムに応じて、研修なり留学する学生に対して単位をきちんと与えるというような事で理解をすれば良いと思う。

(委員)

「研修」と「留学」の使い分けに関して、ICU の例を出すと、英語教育プログラムの一環として全て単位を認められるという、海外語学研修プログラムというものがあり、それは、あくまでも言語、英語に関して単位が与えられるという形。その場合には「研修」という言葉を使う。それから1年間の交換留学プログラム、それは語学ということではなく、実際の専門のコースを取っていくということ、その時には「留学」という言葉を使っている。その使い分けはそういう形でやっている。いずれにしても全部単位が認められる。

(委員)

この福岡エリアなり周辺エリア、国外ではなくて国内の他大学の間単位を共同で認めるという、何かそういう制度があるといい。今ここにあるわけでは無いが、例えば、言語能力、英語能力を高めるというプログラムを九州大学が英語で一貫して行っているとすれば、それを受ければ認めてもいいとか、何かそういう、ある種の単位互換だが、そういう一般的な単位互換制度があると便利だと思う。この地域にはまだ出来ていない。留学だったら外国へ行かなければならないということもあるので、国内でそういうチャンスがあればもっと活用したらどうか。APU では、日・英2本建て授業が行われていて、半面が英語で全科目やっている。だから例えば、福岡女子大学で英語の対応力がある学生が、クォーター、セメスターだけAPUに行く。そこで英語で単位を取ると、取るのは英語の授業に限るというふう限定して、そういう単位をこちらで認めるということもあり得る。それは別にAPUだけじゃなくて、九州大学や西南学院大にもそういうチャンスがあるかも知れない。留学ということが目指す効果を何も国外に絶対行かなくてはならないかどうかということはあるような気がする。APU のような所は、半分はそのような環境があるから、それを上手く使うということはあるのかなと感じている。そういうことをお互いの大学のメリットのために認め合うというか、学長間の合意でもあれば、出来るのではないかなと思う。だから留学の問題というのは、目的に合わせて、もうちょっと柔軟に考えてもいいかなと思う。

(委員)

今のは、単位互換制度の事だと思うが、だとしたらもう少し広げて、何も語学に限らなくてもいい。ICU は単位互換制度というのがあるが、国内の一橋だとか津田塾だ

とかそういう所とやっている。

(委員)

言いたいのはそういうこと。

(委員)

ただ ICU が直面してる難しさというのは、単位互換をする相手先が、ICU はいわゆるクォーターで、相手がセメスターだったり1年だったりすると上手く行かなくて、そういう問題があるが、似たような所とやれば単位互換制度というのを大いに活用すると色々なバラエティーのあるコースがとれる。

(委員)

京都は 50 の大学が全部単位互換する仕組みを持っているが、福岡ではまだそれが出来てない。このエリアでやっても良いんじゃないかと別の所で提言したこともあるが、要するに言語能力を高めるといようなことで、何も言語科目だけじゃなくて専門科目で開講しているところで、それは受講可能にするとか、一方通行ではだめだが、何かそのようなことの可能性はできないだろうかと思う。一般的な単位互換にするのか、もうちょっと目的化したものにするのかは工夫したらいい。

(委員)

それは個々の大学がこれから検討して行かなければならない課題。ただ、1つだけ、福岡女子大生が他大学に出かけていくには支障はない。しかし他大学から本学に男子学生が来るとなれば、本学は基本的に女子だけが前提なので、その辺りが問題。

(委員)

その問題は、京都でも単位互換をするときに大分議論をしたので良く知っているが、女子大は男子にも開放している。何かこういう可能性について少し残しておいたらいい。単位互換というのは大学間のそれぞれの思いがある。しかし特定の大学の学長が、合意するところから始めたらいいわけで、全部の大学を入れなければいけないかどうかは別。もしそれで英語の科目で専門科目も含めて、開講するとすれば、やはり女子大でもそういう科目を幾つか作らないといけないということになるから、刺激は大きいのではないか。

(委員)

留学協定を結んで海外からの学生が福岡女子大学に来るとき、彼らにどういうふうな日本語教育をするか、日本語を学ばせるか、それは考えないといけない。初めて来

た時には、日本語がしゃべれないからそれは関心の的になっている。海外から来る時、これをどうするかということ。ドミトリーと日本語の教育システム。

もう1点は、高麗大学で韓国語学ぶために来る学生が年4,500人、そして、日本の様々な大学から来た学生が約500人くらい、そして彼らは大体3、4週間で色々なプログラムを終了すれば単位が認められる。中国語、韓国語習う場合には短期でも、相当インテンシブに教育を受けることができ、あまりお金もかからない。福岡女子大の学生が行く場合には、梨花女子大学が良い。梨花女子は韓国語だけでなく英語も本格的。

(委員)

新生女子大が積極的に国際交流を進めて、これからどんどん海外に協定校を増やしていき、学生のやりとりを積極的にしていくのであれば、それに関わる教育プログラム等も開発していくことが必要になってくる。そうした業務を推進していく、何か部門というか専門グループはあった方が良いと思う。その場合、学内的に委員会を立ち上げて、委員会でそうした業務を所管するようにしてもなかなか上手くいかないと思う。そういった業務を支援する事務体制も当然必要になってくる。

APUもそうだと思うが、どの大学も国際交流を活発に行っている大学は一応そういう、外からも目に見える独立したセンターなり部門というのがあって機能しているように思う。

国際交流といったときに、来た学生に対する、ここでは日本語教育プログラムの提供ということが謳われているわけだが、国際交流、例えば新たに交流協定を結んでいくとか、色んな形で国際交流を進めていくという業務と、来学した学生に対する日本語教育プログラムの提供というのは必ずしも仕事内容は重ならないのでその辺を女子大はどういう体制で行っていくのかということになると思う。日本語教育プログラムに関連していうと、先ほどから出ているような英語集中プログラムの充実とかアジア重視で中国語や韓国語教育を全学的に展開していくというような話が出ているが、そういう要するに英語、中国語、韓国語、日本語といった語学教育を学内の何処が統括するのか、英語教育も当然片手間では出来ない、専門家が必要になる、中国語、韓国語にしてもそうだと思う。ただカリキュラムだけ作って非常勤を置いてそれで終わるという話ではないと思う。

(委員)

受け入れの時の日本語教育というのはなかなか大変。要するに日本の大学はみんなある程度は日本語が出来ないと受け入れないことになっているが、その能力で日本の大学の授業を受けられるかといったら、とてもとてもついていけない。だから入った学生を並行して、相当トレーニングしないとイケないわけで、それには各大学苦労し

ていると思う。

(委員)

逆に言うと、もし新生福岡女子大で充実した日本語教育プログラムが提供できれば、それが呼び水になって海外から留学生が集まってくるということも可能だろう。そして受け入れる留学生が増えると福岡女子大から送り出す留学生を増やしていける、ということに繋がっていく。一方的に送り出すから受け取ってくれという一方通行の国際交流は今の時代、出来ないので、送り出す以上は受け入れも行って行かなければならない。そして留学生を受け入れる時に福岡女子大が如何に魅力ある受け入れ先になるかということの一つに、充実した日本語教育プログラムというのがおそらくは挙がってくるだろうと思う。

(委員)

これはかなり留学生を受け入れるときに勝負を分ける。外部の学校に頼んで依存するのでは限界がある。

県としてアジア人材交流を進めようとしている。その一環が、「留学生サポートセンター」のスタートだったのだろうが、何かそういう機能とか、その中で少し考えていかないと、女子大だけのインフラでやろうと思ったら大変だろうと思う。だからそこは、九大との接合もあるだろうし、他の大学との関係もあるだろう。

(委員)

ただ、日本語教育と英語教育というのは多少違うかも知れないが、やはり、語学教育ということを中心に謳っている場合には、私はアウトソーシングというのはあまり好ましくないと思う。確かに色々経済的な問題とか沢山大きな問題があるとは思いますが、やはり、かなりのウエイトで前面に押し出している以上、やはりコアになるきちっとした語学プログラムも専任の人達でしっかりやっていくということはかなり声高に言いたいと思う。勿論色んな事情があって、色んな大学でアウトソーシングをしているのは分かっているが、やはりそこは押さえておくべきこと。

(委員)

アウトソーシングの何処がいけないのか。例えばちゃんとしたプログラムを作ったこういったカリキュラムでやってくださいとお願いしたとすると。

(委員)

ただ単なる語学で技術スキルのなところだけで良いとするのならば、それで良いのかも知れないが、これを売りであるとするならば、スキルと捉えるか、さっき言った

教養教育の一環として捉えるか、理念的な違いだと思う。

(委員)

受け入れ送り出しのサポート体制という議論は提言の中にも、この準備委員会でも意見があった。その整理が付いてなかったということで、それは入れなくてはいけないと思う。今後国内での留学生は非常に増えるであろうという見通しがあるし、特にその中でもアジアからの留学生がもっと増えてくるだろうから、そういったことも踏まえて女子大が留学生を受け入れるためには、やはり、日本語プログラム、それから、サポートする仕組みというのを持たないと大学の特色にはならないだろうと思う。それを女子大で全て出来るのかというようなことになると、そこは色んな九大あたりとの連携も必要だろうと思うが、基本的なものはきちっと備えておかないと発展性が望めないということになるんだろうと思う。

(委員)

留学、特に出す方の留学は、全員に義務づけるのではなくてオプションなものだという理解でいいか。その時に「4年間の教育システムの一部として組み入れる」という文言があるが、この文言がどこまで責任を持って実行できるのかというところの見通しはどうか。つまり、交換留学のことは基本的に念頭にあるという、そういう理解でいいのか。

(委員)

その辺り、まだ詳しく検討していない。あるプログラムと言うか語学のあるレベルをクリアしたとか、そういった形で本学の英語の単位として認めるということはあると思う。

(委員)

それと、学生寮のところで、「学生のアクティビティを単位として関連させることを検討する」と、これは果たして可能なかと若干危惧するが。

(委員)

その表現は私もちょっと違う意味で引っかかった。学生が企画・主催するイベントで、その後ろに例として「外部の方を招聘しての講演」というふうになっているが、ただ外の方を呼んで、例えば授業が終わった夕方とか夜、あるいは週末に何か講演会を開いて話を聞いて、それに出席すれば単位が貰えるということではちょっと足りないのではないかなと思う。そうではなくて、学生が企画主催するものの内容というのが、例えば留学生等も含めて、且つ、その、最前から謳っている地域と関連したような何

か社会活動を積極的に進めていくような内容で、それも夕方1回だけとか週末1回だけではなくて継続したもので、一定の期間、学生寮に住んでいる学生達が一丸となって地域社会に出て行って活動をする。その中にはサービ斯拉ーニングなんか入ってきてもいいと思うが、そういうことを一定期間行って、その内容を福岡女子大の教員がきちんと確認をして、場合によっては教員側から課題等の設定も行い、学生は活動を行うとともにきちっとレポートにまとめて提出し、教員に確認をしてもらい、というような一連の活動があれば、課外活動として単位を与えるということをしてもらいたいと思う。

(委員)

APUの話だが、APハウスで、レジデント・アシスタントという仕事を学生を募集してやらせている。フロアのセクションごとにアシスタントが居て、それで外国から来た留学生を、市民生活に馴染ませるようなことも含めて色々指導をするような仕事をさせている。これを読んだ時に、パッとそこに結びついた。APUではそれを単位にしていらない。まだというのか、それはしていないが、成果を単位化することは考えられる。また、たとえばバディ・システムというのがあるが、そういう仕組みに組み込んで、1年間やってレポートや何かでちゃんと成果を出したら、それで単位をやるということはあるのかな、ということで、これを理解した。留学生と一緒に生活するというのを前提にすれば、そういう1年間の活動成果を認めてやるということもあり得るのかなと思う。だから、これはもうちょっと議論したらいいと思うが、それは寮の性格が留学生収容をかなり積極的にやるということだから、日本の学生にとっては、そういう成果の評価の仕方もあるのではないかな。

(委員)

あとは、例えば留学生のサポートをする学生に関しては、寮費を半減してやるとか免除してやるとかいうような形での学生支援というのもあり得るかも知れない。

(委員)

単位というのはかなり大学としては重たいものだから、そういうことで何か出来るかなと思った。

(委員)

だから実際にそういう交流が出来上がったならそれをどうするかというのは実際の大学が始まってから大学内で検討すればいい。これを単位として認めるようなものとするかどうか。

(委員)

そう思う。

(委員)

「支援体制」の項の奨学金に関する記述が分かりにくかった。「また、奨学基金を安定的に維持していくため、広く民間から寄付を募るなど、積極的な募金活動を展開するとともに」とあるが、民間から募金を募る活動というのが、奨学基金の安定的な維持にどうつながるのかが、私には理解がいかなかったので確認したい。「募金を募っていく」というのは、例えば奨学基金のすそ野を広くしていくという活動で、必ずしも安定的な運営ということにはつながらないのではないか。

(委員)

通常、基金といった場合に、運用利息でそれを運営していくという考え方があるが、今の金利情勢からして、相当な基金を集めても運用利息で留学制度を支援することにはなかなかならない。だから、ある程度取り崩し型の奨学制度というものを考えなくてはいけない。そうすると安定的に寄付をしていただけるような考え方と言うか、そういう支援をとっていかなくてはいけないだろうということ。大口でなくても、毎年女子大に対して寄付をしていただける、そのように寄付を募っていくということも大事だし、特に企業と連携して色々やっていこうということだから、そういった企業にも協力をしていただくというようなことを想定をしている。それで「安定的」という言葉が入ったのだと思う。

(委員)

これもがんばるということで、入れておいたらどうか。

(委員)

「学生募集は、3つのコース単位で実施することを基本とする」という部分と、「コースの移動を滑らかにする」というもう一つの目標の整合性がどうなるのかという点が気になる。

例えば、「国際教養コース」で入った学生が、「食・健康コース」に変わりたいということになった時に、コース単位で入試をするということは、多分受験科目や何かが違うことを想定していると思うが、そうすると、結局は変更できるとは言っていないもコース変更は難しいのではないかと思う。その点については問題がないのか。

(委員)

その点について、実際の運用としては、学習順序も含めてかなり厳密な積み上げを

必要とする専門分野もあるが、さほど厳密さを必要としない専門分野もある。そういった意味では、1年終了時あるいは2年終了時にコースが変わるということは不可能じゃないと思う。実際は、かなり動けるのではないかと考えている。そういった意味で、ここのところは、基本をどうするかということを書いて、あとはどのような表現にするかということところは工夫が必要だと思う。今の現実問題として、高等学校1年のときに基本的に理系と文系に分かれてしまうというようなことがあり、大学に入学する時点で自分が得意とするパターンに合う入試によって、大学での専門分野を決めるというのが現実。一方で、先ほどのアンケート結果では、多少は専門を変えたいという希望も半分くらいあった。その辺りの兼ね合いが難しい。

(委員)

先ほどのアンケート結果を見ると、今回の福岡女子大学によく入学をして来る高校の生徒のアンケート結果は、一般のアンケート結果の印象とは違うというのが最初の感覚。その中で今回は、「2年生、3年生次で決めた方が良い」という意見が非常に多かったというところに関しては、もうそのままそのように捉えていいと思う。そうであれば、入学段階からもうコースを決めておいた方がいいということではなくて、2年、3年次で決めるということで先送りしておくことも、これもありなのかなという気がした。今回対象となった生徒達の中ではこういった入試の選抜のやり方とかいったところも望まれているのではということも新たに発見した。

(委員)

ここでは、表現として「基本とする」と書いてあるから、一応コースに入ってしまうんだと理解することになる。そして、なおかつ入学後にある程度自由に変われるというような情報がまた別のところにもあるわけ。その辺りのことを、受験生としては、もう少しはっきりさせてもらいたいと思うかも知れない。

(委員)

小さい大学で、選択の幅がたくさんあるわけではなくて、これくらいの幅の中で自由によろしいですよといった時に、そこにどれだけの魅力があるのか。ある程度専門と言うか、高校生は、どういう専門性を身に付けたいという思考がかなり先に働くのではないか。その上で、でも入ってから色々変更は可能ですよ、そして、当然それについては履修指導というものをやっていくことになると思う。入り口の段階では、例えば「環境」なり「食・健康」のほうに進みたいという学生が本当に、そっちに進めるのかという、そういった不安を払拭する必要はやはりある。しかし、入学時に決めてしまうのではなく、やはり1年間基礎教養をしっかりとやって自分の興味・関心を見極めた上で変われる仕組みというものはきちんと持っておきますよということ。

(委員)

二つの違うメッセージをこのひとつの基本計画の中で出してしまっているような気がする。片方では「自由に選べますよ」というメッセージを出して、それが全体的に1つの学部にしたということの意味だが、でも同時に「コース単位で選抜をしますよ」と言われると、やはり最初から基本的には行きたいコースを受けたいんだというメッセージがある。何かちょっと腰が定まらないところがあるのではないかという印象を持つ。

(委員)

高校生からは「3つのコース単位で実施することを基本とする」という表現に対して、「変われますか？」という質問が、例えば説明会とかで必ず出てくると思う。そして、もし変われるとしたら、どういう条件がかかるのか、例えば高校の履修科目で制限をされるとすると、やはりそのこのところをきちんと受験をする前の段階で、このコースとかこの専攻にはこの科目の履修、高校での履修が必要ですということをきちんと明言をするべきだと思う。

(委員)

入試の時に、英語の力を要件にしたり、コースによってその力に差をつけることについてはどうか。

(委員)

基本計画でそこまで固めるのはどうかと思うが、ただ、「国際系のコース」を希望する学生にとって、半年から1年の海外留学を奨励していくというスタンスなので、英語による科目も相当数出てくると思う。英語の力を付けるだけで4年間が終わってしまうということでは駄目なので、入学選抜の段階である程度精査をしなければならないと思う。

(委員)

コース変更したい時に、入学時の英語力や高校時代の履修科目が問題になるのではないか。

(委員)

「国際系コース」にコース変更をしたいと思えば、英語集中プログラムで到達点があるので、一生懸命がんばってレベルを上げてもらうことになるし、「環境」に移りたいということであれば、環境の専門に行けるだけの基礎学問を、1, 2年次の教育

の中で選択し、履修をしていくことになると思う。

ただ、栄養系、食系は管理栄養士の養成施設ということになると、1学年の人数制限があるので、初めからこのコースに行きたいという学生がそこに進める、その方向はある程度考慮する必要があるのではないかと。他のコースとの出入りを見て運用していくことになると思う。

(委員)

多分、変更希望を持つような学生の可能性としては、例えば「食・健康コース」という、割と専門性の強いところを目指して入ってきたけれども、どうも自分のやりたいことはここではなかったということで、そこから「国際教養コース」なり、「環境創生コース」の方に移っていくというケースがおそらく多くて、「国際教養コース」で入ってきた学生が2年生が終わるときに突然、「食・健康コース」に変わりたいというのは少ないのではないかと。

(委員)

その予測は立てにくいと思う。仕組みを作るときに、「大丈夫です」と言っておいて移れない仕組みなのであれば、最初から「大丈夫です」とは言わないで「多少制限があります」とかなんとか言うべきではないかということだ。

(委員)

「一定のコース変更を認める」ということで、「全面的に自由にコース変更を認める」とは言っていない。ただ、高校生の立場からすれば「一定の」というのはどういう「一定の」で、どういう条件が付くんですかというように、どうしても踏み込んで質問したくなるというのは分かる。

(委員)

結局、このコースにはこの履修要件、高校での履修要件が必要ですということをもう専門教育の立場から指定していただければ、そして、例えば理科の中の生物なり化学なり物理なりが必修、高校のときに必修履修ですということを明言していただければ、もうここにこうやって書いているから、あとはその中でその範囲ですということと言えるのではないかと思う。

(委員)

一般的な指針として、ここで「3つのコース単位で実施することを基本とする」、そこだけで終わるのではなくて、「ただし一定数の範囲での変更は可能である」とするとか、そのあたりのところの工夫が必要かどうか。

(委員)

ただ、書き方の工夫だけではなくて、新しいカリキュラムで、例えば1, 2年次に取る科目で必ずしも理系専攻でなかった学生が理系にシフトしていけるようなカリキュラムを福岡女子大が入学後に準備するつもりがあるのか、あるいはそこまでは準備できないから、高校レベルで、化学のⅡまでとか物理のⅡまで取っていない学生はどう希望しても理系コースへの変更は認めがたいという基本方針でいくのかは決めておかないといけないのではないかと。

(委員)

基本計画の段階でそこまで決めるのか。そこはこういったプログラムやカリキュラムを組めるのかによってどっちを選択するのかということにもなってくるのだと思う。「一定の」と記入しているのは、管理栄養士の資格取得を想定した場合に、2年からでは間に合わないの、管理栄養士に限っては1年終わった時点でそこのコースに行くということを決定しないと留年前提になってしまうということ。今の基本計画の骨子の段階で細かいことを全部記述していくということではなくて、基本的な枠組みとしてはこういう表現かなと思う。そのような選択をする時期の問題を除けば、基本的にはどのコースにも変更が可能だという考え方。その際に、入試の段階で高校のときの履修科目が前提になる、あるいは、1年の時に文から理の方に変更するのなら、こういう用意したプログラムに沿って履修しないといけない、こういうことは具体的な条件として出てくるのだと思う。それから1つのコースに殺到したときにどうするのかという問題もある。これは今からまた、制度設計のところで議論しなくてはならない。

(委員)

高校までの縛りをつけてしまうと、相当な縛りだなという感じがするので、ちょっと懸念をする。

(委員)

この件については、どちらかと言うと、一本の入試で行ったらどうかという思いは強い。それで2年生の時には分けますよ、ということで期待感を持たせていくのがいいのかな、という気がする。専門科目の問題がそんな大きな障害にならないのであればその方がいいのではないかと思うが、一本の入試でやったときの懸念は、その年によって偏りが出てくるというリスクがある。これはちょっと悩ましい問題。

(委員)

英検のレベルを受験資格要件として求めるのであれば、それは非常に重要なところになるので、そのことは基本計画に書かないといけないと思う。

(委員)

「入学者選抜の方針」のところで、福岡女子大学ならではの方針みたいなところ、例えば「リーダーシップ」であったり「異文化理解」であったり、そのような文言はもう入らなくても、もうこのままでいいのかどうかということがある。一般的な入学選抜の方針として見受けられるところがある。二つ目が、「多様な入試選抜を行う」ということで、これはもしかしてこのあとに関わってくる話かも知れないが、3コース単位でのAO入試、一般入試、推薦入試、面接、ということを行っていく際に、例えばそれぞれのコースごとのAO入試での評価基準が、変わっていくとか、そういったところについても考えた上で、このような選抜方法をとろうとしているのかということがある。恐らく入試そのものが大学と高校生とを繋ぐ入り口の顔みたいなところになる中で、それをどのように高校生に表すのかとか、どういう文言で高校生に発信するのかということが大事になってくる部分だと思う。一般的ではなく福岡女子大学ならではのという文言があった方がいい気がする。

(委員)

高校の現場で、高校生たちに、入り口は1学部ですけどこういうふうに分かれて入るんですよと言うのと、入って1年目過ごした後で選択の機会があるんですよと言うのと、受ける印象というかインパクトというのはどのようなものか、若い人たちとか、あるいは先生方とか。

(委員)

やはり大学に入って決めるということの方が、なかなかはっきり決められない高校生にとっては、少し問題を先延ばしにできて安心なところはあると思う。でも実際問題として、ひとつのコースに集中したりしても困るところで、ちょうど折衷案としてはこうならざるを得ないんじゃないかなと思う。

(委員長)

次に進みたい。

「第8 教職員の確保」

「第9 改革の実施時期等」

「第10 新たな施設の整備」

(委員)

「大学院の設置は学部設置後に検討する」ということは、今の段階では、設置しないという選択肢もありうる、と理解してもよいのか。

(委員)

検討の結果、設置をしないということもありうるのかなと思うが、どういう大学院をつくるかということ。こういう大学で国際的な教育研究で海外と連携できるような大学院というのはどういうものかということを中心に考えなくてはいけない。今、こういう大学を新しくつくっていくときに外部から教職員の方を採用していかないと、とても現在だけのスタッフでは無理だろうと。そういった新しい体制の中で大学院というものを考えなくてはいけないだろう。今の段階でこういう大学院を設けますということはなかなか見えてこない。

(委員)

「学生寮の部屋はシェアルームを基本とする」ということになっているが、現在の若者達の生活状況からして、共同部屋ということではかえって問題が大きくなることもあるのではないかと思う。要するに一緒に生活できなくてそれが原因で精神的に参ってしまうとか。だから、どうなのかなという危惧を覚える。

(委員)

シェアルームと云ったら、たとえば4LDKとか、4DKとか、ひとつの家みたいな居住単位を考える。個別の部屋が4つあり、あとは共同で使うキッチンとかリビングがある。そういったタイプのものをシェアルームと表現しているのではないかと思うが、その辺りはどうか。

(委員)

例えば4人部屋であれば、4人の共同部屋の中にそれぞれ個室があって、他の共有施設が備わっているというようなこと、トイレであるとか台所であるとか、そういうイメージ。

(委員)

個室は確保されているが、同時にその数名の共有部分もあるという意味か。

(委員)

結局、体験学習とか実践型の学習であるとか、色々な新しい教育をどんどん取り入れていこうということだから、その基本はやっぱりコミュニケーション。少なくとも

学生寮でそれを嫌がるような学生が、じゃあこれから4年間の大学教育の方針についていけるのかという問題もあるので、やはりそこは寮の中でそういった力というものをきちんと身につけていただくことが必要だろうということ。

(委員)

ただやはり、若い人たちはなかなか一緒に暮らせないばかりか、精神的にそれが病気になるって現れることがよく見られるので、ちょっと危惧している。意図は充分よく分かるが、その共同のところがどこまで共同でどこまでプライバシーが確保できるかということがやはり非常に重要ではないかと思う。

(委員)

最近出来ている寮は、個室の部分には机とそれからベッドがきちんと確保されていて、トイレとかリビング、それと炊事をするところは共有になっているものがある。それから、そういう4人部屋の中にトイレを共用ということで嫌う学生もいるので、各階に共同のトイレを作るとか、そういう寮が最近多い。

(委員)

であれば、その表現の仕方として、学生寮はそういった、「共働・共生」の生活が十分に促進されるようなデザインのものにするとかいう言い方にした方がいいのでは。

(委員)

そうしておいた方がいいかも知れない。

(委員)

共働作業が活発に行われるような、そういう寮をデザインして提供するつもりという言い方がいい。

また、「施設」のところで、この書き方からでは、何となく一つずつそういった施設を個別に作っていくという印象がある。例えば多目的ホールとか多目的講義室とか学内に設けて、そこでは比較的大きな催しもできるし、あるいは学生達が企画するような催しもできるように設備を整えていくというような表現の仕方も可能かなと思った。福岡女子大の場合は1学部でまとまってやっていくわけだから、学内にきちっとした設備を作って、それを多目的で使っていく、そういう施設の設営・運営の仕方を考えていくということをアピールした方が、プラスのイメージが出るかなという気がする。

(委員)

「入試体制の充実・強化」の中に「高等学校へのPR」だとか「オープンキャンパスの充実を図るなど、積極的な情報発信活動を展開する」とあるが、この時に、学生の活力みたいなものを積極的に使うということを明記しておいた方が良い。大学のアピールは先生や事務局だけがやるのではない。だから、学生の力を引き出すというのを何か表現した方が良いのではないか。入試だけじゃなくて、学生の情報発信力というものを最大限引き出すような工夫をするというのを、どこかちゃんと入れておいた方が良い。学生の出番がなかなか無い。だけど大学をつくるうえで、学生の出番はすごく大切だと思うので、ちょっとその脈絡をどこか入れておくと、これは高校生との繋がりでも多分生きてくると思う。入試のところが一番良いかも知れない。

(委員)

オープンキャンパスなんかで学生にやってもらおうと、先生が言うよりもやはり同じ目線で、つい最近経験した学生自身の言葉に耳を傾けることが多いので、やはりそれは大いに活用した方が良い。

(委員長)

一通りご審議いただいた。ほぼ骨格的なところではまとめていただいたのではないかと思う。今後の進め方については、皆様からいただいた意見をもとに修正版を作り、後日送付させていただく。それに対する意見を再度いただき、最終的な修正については、委員長・副委員長の方に任せていただくということによろしいか。よろしければ、そうさせていただいて、最終的な基本計画案が完成したら、委員の皆様方にお送りしたい。

今後のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

本日いただいた意見と、追って送付差し上げる修正版に対する意見を踏まえ、「基本計画(案)」を完成させ、基本計画を決定したいと現在のところ考えている。その後は、来年の1月を目途に、準備委員会の委員の方々、加えて関係する分野の有識者の方々に若干さらに加わっていただき、専門部会長会ならびに専門部会を設定し、検討事項の調整、カリキュラムの編成、それから学外実習先の確保など、基本計画の具体化に向けた検討を行っていく。また、専門部会設置後も、節目において、作業の進捗状況をこの準備委員会本体の方に報告したいと考えており、準備委員会の意見も踏まえながら開設に向けた作業を進めていきたい。

(委員長)

皆様の専門部会の委員の就任の件については、今後の具体的なスケジュールや作業内容を検討した上で、個別的にお願いにあがりたいと思っている。その折は、是非ご協力のほどよろしく願います。

次回の準備委員会の開催については、専門部会の作業の進捗状況を踏まえ決定し、お知らせしたい。

本日の委員会はこれで終了させていただく。